はしがき

本書は、平和研究・教育の映像資料として広く参照されるべきテレビ・ドキュメンタリー番組を厳選した上で、番組の歴史的な文脈やグローバルな背景について専門家による解説を付したものである。番組の選考にあたっては、1．平和研究・教育の題材として重要であること、2．正確かつわかりやすい解説がなされていること、3．その分析に深みがあること、4．将来を見通す予見性をもっていること、5．作品の構成や表現などに工夫が見られることの5点を基準とした。

平和研究・教育の題材の範囲は、平和概念の定義次第では際限なく広がりうる。そこで本書では、その題材を、20世紀の世界、冷戦、アジア太平洋戦争、日米関係の中の沖縄の現実、原爆の経験、そして原発事故の経験に絞った。

第Ⅰ部「映像の20世紀」は、第二次世界大戦終結50周年に放送された『映像の世紀』と70周年に放送された『新・映像の世紀』のシリーズを取り上げ、映像に記録された激動の世界を編年体で通観しながら、20世紀の平和と正義の相克を浮き彫りにする。

第Ⅱ部「破壊と分断の世界」は、第二次世界大戦から冷戦終結までの世界における破壊のテクノロジーと分断のイデオロギーの意味に向き合う。検討の対象となるトピックは、戦略爆撃から、集団虐殺、総動員体制（徴兵・徴用）、瀬戸際外交、冷戦終結、核兵器裁判まで多岐にわたる。

第Ⅲ部「アジア太平洋戦争に向かう日本」は、国際的孤立から敗戦に至る通史を描く総論的な番組と、調査研究を踏まえ特定論点を深く掘り下げる各論的な番組を扱う。なお、『アジアと太平洋戦争』は、2020年8月時点ではDVD化もネット配信もなされていないが、日本の侵略によって苦痛を被ったアジア諸国の視点に立つ番組が少ないことから、ここにあえて紹介する。

第Ⅳ部「日米戦争と日米同盟――オキナワの現実」は、日米関係の中に置かれた沖縄の現実を、太平洋戦争期から施政権返還後までたどる。戦争経験者は、占領下の住民は、政府中枢のキーマンは、そして現代に生きる人々は何を語るの

か。沖縄の経験から見えてくる日本の姿を見つめる。

第Ⅴ部「原爆と人間――ヒロシマ･ナガサキの人類史的意味」は、被爆もまた、非常事態にあっては「国民のひとしく受忍［すべき］」犠牲や損害の一つにすぎないとした戦争被害受忍論をあらためて問い直す。被爆者たちは何を語り、何を語らないのか。原爆は人間の身体と精神にどのような痕跡を残したのかを考える。

最後に第Ⅵ部「ヒロシマ・ナガサキからチェルノブイリ・フクシマへ」は、広島・長崎の被爆／被曝を経験した人類が、なぜチェルノブイリや福島などの原発事故における放射能汚染と放射線被曝を避けられなかったのかを考える。特に、福島第一原発事故については、その発災後の住民避難と電力会社の対応を振り返り、復旧・復興については、放射性廃棄物の処理、廃炉・除染・賠償をめぐる負担の配分について問う。

本書の構成は上記のとおりだが、番組の選考が選考担当者の偶然の視聴経験に左右されないようにするには、網羅的な番組リストと選考候補作品の視聴は欠かせない。本書において解説される番組が『NHK スペシャル』に限られているのは、選考にあたり NHK のご協力を得ることができたからである。特に、2011年当時、NHK 放送総局副総局長であった新山賢治氏のご示唆・ご支援なくしては、本書の企画は関係者の淡い願望に終わっていたことであろう。ここに記して心からの謝意を表したい。

本書の企画者からすれば番組の体系的な選別が必要だが、一般視聴者としての読者からすれば精選された番組への容易なアクセスが必要であろう。この点において、NHK スペシャルは、全国各地の放送局で無料番組公開（「公開ライブラリー」）されたり、DVD 化・書籍化されたり、さらには登録会員対象の動画サーヴィスを通じてネット配信（「NHK オンデマンド」）されたりしている。また関連して、NHK のウェブサイト「戦争証言アーカイブス」において前線と銃後の証言も視聴できる。

なお、選考作業にあたっては、放送文化基金の2013年度の助成（研究課題「平和研究・教育における映像資料活用のための基礎的調査研究」）を受けた。このこともここに付記しておきたい。

テレビ・ドキュメンタリーという映像資料に歴史的な意義づけを与え、その社

会的価値を確認するというこの企画は、日本平和学会創立40周年記念事業の第三弾にあたる。第一弾は『平和を考えるための100冊＋α』として2014年に、第二弾は『平和をめぐる14の論点――平和研究が問い続けること』として2018年に、いずれも法律文化社から刊行されている。本ドキュメンタリー事業は、同学会の「戦争と平和を考えるドキュメンタリー・ワーキング・グループ」（WG の構成は、第１期において石田淳／内海愛子／我部政明／東大作／最上敏樹、なお、選考協力者として高原孝生／横山正樹、そして第２期において石田淳／上野友也／小松寛／佐藤史郎／清水奈名子／下谷内奈緒）を中心に関係各方面の協力を得て進められた。

テレビ・ドキュメンタリー番組の解説書の刊行は、他の人文・社会科学系の関連学会においても類例はなく、学会誌の刊行に偏りがちな《学術成果の社会への還元活動》の領域をこのような形で拡げることができたことは幸いであった。とはいえ、NHK をはじめ国内外のテレビ局が制作してきた力作ドキュメンタリーの数々は、著作権上の許諾の確保が進まなければ、一般視聴者による利用は限られたものであり続ける。とりわけ、戦争と平和にかかわるすぐれたテレビ・ドキュメンタリーの中には、名誉ある賞を受賞するなど高く評価されながらも、世間の目に触れることのない番組も数多い。本書の刊行を機に、貴重な映像資料が社会に開かれた財産として広く永く共有されることを願ってやまない。

本書の企画から刊行まで、企画が野心的であったこともあり紆余曲折があったが、法律文化社の小西英央氏の行き届いた気配りと目配りに助けていただいた。あらためて御礼申し上げたい。

新旧 WG を代表して

石田　淳